

## まえがき〜この本の使い方

本が読めない、という人が増えています。忙しい、集中力がもたない、そもそも本を読んでもおもしろくない……。理由はさまざまです。これは由々しきことだと思っ  
ている人もいます。

しかし、これはそれほど困ったことでしょうか。私は、本は読むためだけのものではないと思っています。本は——あるいはより広く文章とは——もつと解放された場所ではないでしょうか。そのまわりには不思議な磁場が形成されています。いろいろなことが起きています。読むという行為にそれほどこだわる必要はない。もつといろいろなことをためてみるもいい。

本書でお勧めしたいのは、いじる、ことです。読めないなら、まずいじってみたらいい。そして、そこで何が起きるか見てみたらいい。

いじると言う、「触る」「動かす」「からむ」といった言葉が思い浮かびます。物理的にページを開く。書かれている内容を目にとめ、影響を受けたりする。さらに考えたり、質問したり、批判したりする。

……いやあ、何か面倒だなあ、とお思いでしょうか。それはそうですね。みなさん

忙しいのだから。本を読むだけでもたいへん。とても「その先」まで付き合ってもらえない。

でも、それは逆なのです。「面倒だからこそ、いじる。本を読む暇などない人は、まずはいじってみるといい。触ってみるといい。しかも「最初の1ページ」だけでいいのです。

私がここで言う「いじる」とは、内容を読んで味わうとか、考えるとか、批評するといったややこしいことではありません。もつと簡単なことです。読む以前の行為です。とりあえず面倒で時間のかかることは忘れましょう。できることからやる。「いじる」は、その第一歩です。本書ではその例を示します。材料に使うのは、「名作」と言われる日本語の小説。夏目漱石や太宰治や志賀直哉などの、教科書に載っているようなどこかで見たことのある作品ばかりです。

手順は簡単です。まずは作品を手元に置く。図書館から借りてきた全集でもいいし、文庫本でもいいし、PC画面の青空文庫でもかまいません。ただ、できれば書き込みができる方がいい。自分で買った文庫本ならいくらでも書き込み自由でしょう。借りた本の場合はコピーを取る。青空文庫ならプリントアウトする。本書にはサンプルがついていますので、こちらも是非ご利用ください。

そしてあらためて名作と向き合ってみる。眺めてみる。じつと見つめる。

どうでしょう。賭けてもいいのですが、「名作」なるものは、有名であればあるほど、実に珍妙な出で立ちをしているはずですが。思わず「なんじゃこりゃ？」と言いたくなるほど、変。異様。ぜつつつっつたい！と言つていいほど、みなさんは違和感を抱くはずですよ。いったい、どうしてこんなふうになっているんだらう？ どうしちゃったの？ と思う。名作というものは変わった語り口の、きわめて独特な日本語で書かれているのです。この本でわざわざ小説に注目するのはそのためです。

もちろん、「なんじゃこりゃ？」と思つた時点で先に進む気がなくなる人もいるでしょう。「面倒くせえ」と思つてしまう。しかし、これでもう目的は半ば達成したよなもの。「名作」がいかにかへんてこりんなものか、ともかくその不思議さ、異様さ、と出会うことが大事なのです。

で、もうちょっとだけ付き合つて欲しい。こんどはその珍妙な部分に鉛筆で記しをつけてみる。○でも△でも×でもいい。線を引いたり、矢印をつけたり。で、どこがおかしいか、忘れないように書き込みをする。ついでに、一言でもいいからコメントもする。「しつこい！」。「意味わかんない！」。「暗い!!」。そういったもので十分です。どんどん「らくがき」をする。この方法を、私は「らくがき式」と呼んでいます。

先にも言ったように、まずは「最初の1ページ」だけやってみましょう。いったいどれだけ印がつけられたか、それをたとえば他の人のそれと比べてみたらどうでしょう。おそらく印をつけたところはずれている。たまには重なる。それらを見比べるだけで、「へえ」と思う。そうすると、おのずと次のステップに進みたくなります。

本書には十六篇ほどの「名作」の冒頭部分が載せてあります。もしお時間があつたら、私が名作をどんなふうにいじっているか、ためににご覧ください。説明も後に記してあります。ついでにあらすじの解説もあります。これは、最初の「いじり」に対して、自分なりに答えを出してみた結果です。

「最初の1ページ」だけというのは、けっこう重要なポイントです。小説の冒頭部には実にさまざまなもの埋め込まれているからです。作品全体のDNA構造のようなものが刻まれている。そこを読むだけで、「そうか。この小説はそんなふうにかかれていたのかあ」と先回りして言えそうなほどです。

小説というのは一作一作まったく異なるルールで書かれています。感情の働き方、言葉の使い方、雰囲気、トーン、話題……こうしたものが複雑に組み合わせられて、作品ごとに固有の世界が作られている。だから、どんな作品も私たちにとっては異物であり異世界なのです。冒頭部ではそんな作品のルールが一気に示される。私たちは、

作品の異様さや不思議さと「最初の1ページ」で一気に出会うわけです。これは小説を読む醍醐味の最たる部分です。

本書ではそんなふうに見て読み手と語り手とが出会う名作の「最初の1ページ」にフォークスをあて、そこで何が生じているかを、「いじり」を通して示しました。これはみなさん自身に本をいじってもらうための一種の手引きです。でも、このようにせよ、という命令ではありません。あくまで例です。提案です。本とは——文章とは——読むためのものではない、もつといろいろな付き合い方があるのだよ、もつと遊んでも大丈夫だよ、というメッセージが伝わればと思っています。たぶん損はしなはずです。

学校の先生へ

「らくがき式」は、グループディスカッションにも使えると思います。その場合は付録ページを拡大印刷したうえで、四く五人のグループの真ん中に置き、マジックペンでがしがし書きこんでもらうというやり方をお勧めです。

本書の引用は、志賀直哉「小僧の神様」、城崎にて、川端康成『雪国』は新潮文庫から、それ以外はすべてwebサイト「青空文庫」からそれぞれ行いました。